

イスラームにおける非ムスリムの 利 (6/13) : 信仰の自由という 利 (下)

:

明:

イスラームは他宗教の人々に信仰の自由を めます。「宗教に 制はない」とするイスラームの原 について の 史的分析。第二部。

目: [事代におけるイスラームとノンムスリム](#)

より: IslamReligion.com (サ リフ アル=ア イド博士による)

日 19 Nov 2012

集日 19 Nov 2012

ムスリムは 治した土地において、キリスト教会に危害が加えられないように保 しました。シメオンに宛てた手 で、ペルシャにおける主教らの である、ネストリウス派 主教 ジェフ三世はこのように しました。

「神によって世界の支配が されたアラブ人は、あなたがいかに裕福であるかを知っている。なぜなら彼らはあなたと共に生きているからである。それにも わらず、彼らはキリスト教の信条を攻 しない。反 に、彼らは我々の宗教に共感し、主に仕える 者や 人を尊敬し、我々の教会や修道院に 大な寄付をするのだ。」[1](#)

カリフ アブドル=マリクはキリスト教徒から教会を い、モスクの一部としました。ウマル ブン アブドル=アズィ ズが次のカリフに就任した 、キリスト教徒たちは彼の前任の行いについて苦情を述べました。するとウマルは 官に手 を き、もし彼らが金 的な妥案に合意しなければ、件のそのモスクの一部となった教会を彼らに返 するよう命じたのです。[2](#)。

エルサレムの きる壁は、ユダヤ教における最も神 な 所の一つとして有名です。一 期、そこは完全に瓦 や の山の下に埋れていました。オスマン帝国のカリフ、スルタン スライマンがそのことを知ると、彼はエルサレムの 官に瓦 や を取り除き、 に清 して きる壁

を修し、ユダヤ教徒たちが れることの出来るよう命じたので³

欧米の 史家の内、偏向的 点を持たない学者たちもこの事 を めています。ル ボンはこう
しています。

「ユダヤ教徒、キリスト教徒に するムハンマドの 容性は に 大なものであった。彼以前
の 宗教の 立者たち、特にユダヤ教とキリスト教においては、そういった善意が示され
ることはなかった。彼のカリフも同じポリシ に っており、彼の 大さは 疑 者 信仰者を わ
ず、アラブの 史を深く研究する者たちに 知されてきたのである。⁴

ロバ トソンはこう します。

「ムスリムだけが自らの宗教における 意と、他宗教の追 者たちに する 容さを 合するこ
とが出来たのである。たとえ彼らが宗教 搬の自由のために を手に取って った も、自ら
の宗教の教えに うことを んだ者たちはそのままとしたのである。⁵

英国人 洋学者のト マス ア ノルド卿はこう します。

「非ムスリムの少数派に してイスラ ムへの改宗を 要させる 画や、キリスト教に する集
的迫害の 告を、我々は一つも手に入れることが出来なかった。もしカリフの内の一
人もそうした政策を ったのであれば、フェルディナンドとイザベラがスペインからイ
スラ ムを 逐した 、またはルイ14世がフランスでプロテスタントに うのを の 象である罪
とした 、または英国においてユダヤ教徒が350年に渡って追放された と同 の容易さで、
キリスト教を させることが出来たはずである。当 、 方正教会はキリスト教世界から完
全に孤立しており、キリスト教の 端派と なされていたため、世界中のどこにも支持 力
を 出すことが出来ずにいたのである。彼らが今なお存 しているという事こそは、イス
ラ ム国家による 大な政策の 物であり、その最も 力な なのである。⁶」

米国人著者のロスロップ スタッダ ドはこう しています。「カリフ ウマルはキリスト教
で神 される 所を 持するための最大限の 力を惜しまず、彼の に いたカリフたちも彼の志
を いだのです。彼らはキリスト教世界からエルサレムへと巡礼に れる多くの 宗派に敬
意を示しました。」⁷

事として、非ムスリムは彼ら自身の宗派よりも、ムスリムたちのもとでより大きな遇を受けていたのです。リチャードステビンスはトルコの支配下におけるキリスト教徒の について っています。

「彼ら（トルコ人）はローマカトリック教会、ギリシャ正教会をすべて受け入れ、彼らの宗教を保持し、彼らの善良心に任せた。彼らはコンスタンチノープルやその他の多くの所の教会で宗教式が行われることを可した。このことは、私自身言することの出来る、スペインにおいて12年に渡りしたものと正反であった。我々は彼らの教皇式に制的に出席された他、我々だけでなく、我々の子も生命の存がかされていたのである。」[8](#)

トマスアノルドは、著「Invitation to Islam（イスラムへのいざない）」において、当のイタリアではオスマン帝国の支配を待ち望む声が多かったことに言及しています。彼らはオスマン帝国がキリスト教徒の支配民に与えていたものと同様の自由と容性がもたらされることを望んでいたのです。なぜなら、それこそは彼らがキリスト教政府から奪取ろうと必死になっていたものだからです。また彼は、15世末には非常に多くのユダヤ教徒たちがスペインによる迫害を恐れ、オスマントルコへと亡命していたことについて触れています。

次のことは再度されるべきでしょう。スペインからアフリカ全土、シリア、インド、インドネシアまで、イスラム世界全般における数世に渡る非ムスリムとの共存こそは、イスラムによって他信仰の人々に差し伸べられた、宗教的容性の明らかなのです。しかし残念ながらこうした容性は、スペインでられたように、それを利用したキリスト教徒たちによってムスリムの逐へとつながってしまいました。彼らはムスリムの弱みに付け込んで彼らを攻撃し、改宗を要した句に追放したのです。エティエンヌデニルはしています。「ムスリムたちは、多くの人々が想像しているようなこととは正反の人々です。彼らはヒジャブ

の外からは、一度も暴力行に及ぶことはありませんでした。キリスト教徒たちの存在がその事柄です。ムスリムたちが彼らの土地を支配した8世の、キリスト教徒たちは完全なる安全性を享受していました。彼らのうち少数はコルドバで高官をめることも出

来ましたが、キリスト教徒たちが 威につくようになると、彼らの第一の 心事はムスリム放逐となったのです。」 [11](#)

Footnotes:

[1](#) Arnold, Thomas, *‘Invitation To Islam,’* p. 102

[2](#) Qaradawi, Yusuf, ‘Ghayr al-Muslimeen fil-Mujtama’ al-Islami,’ p. 32

[3](#) Hussayn, Abdul-Latif, ‘Tasamuh al-Gharb Ma’ l-Muslimeen,’ p. 67

[4](#) LeBon, Gustav, *‘Arab Civilization,’* p. 128

[5](#) Quoted in Aayed, Saleh Hussain, ‘Huquq Ghayr al-Muslimeen fi Bilad il-Islam,’ p. 26

[6](#) Arnold, Thomas, *‘Invitation To Islam,’* p. 98-99

[7](#) Stoddard, L.W., *‘The Islamic World At Present,’* vol 1, p. 13-14

[8](#) Quoted in Qaradawi, Yusuf, ‘al-Aqaliyyat ad-Diniyya wa-Hal al-Islami,’ p. 56-57

[9](#) Arnold, Thomas, *‘Invitation To Islam,’* p. 183

[1](#) 0 ヒジャズ: マッカとマディナを する、アラビア半 西部の地域。

[11](#) Denier, Etienne, ‘Muhammad The Messenger Of God,’ p. 332

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/381>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。